

城が谷遺跡群発掘調査報告

—石田工業工場用地造成にかかる—

1 9 7 3 . 3

広島県教育委員会

城が谷遺跡群発掘調査報告

— 石田工業工場用造成にかかる —

目 次

I	はじめに	(1)
II	位置と環境	(3)
III	調査の経過	(7)
	1. 発掘調査の経過	(7)
	2. 発掘調査日誌抄	(9)
IV	調査の遺跡	(10)
	1. 城が谷住居跡	(10)
	2. 城が谷1号箱式石棺	(10)
	3. 有岡谷1号古墳	(17)
V	まとめ	(26)

図版目次

- | | | |
|------|------------------|-----------|
| 図版 1 | a 住居跡遠景 | b 住居跡全景 |
| 図版 2 | a 住居跡全景 | b 飢出土状態 |
| 図版 3 | a 城が谷 1号箱式石棺遠景 | b 箱式石棺全景 |
| 図版 4 | a 人骨出土状態 | b 同上部分 |
| 図版 5 | a 有岡谷 1号古墳遠景 | b 同上石室全景 |
| 図版 6 | a 石室内遺物出土状態 | b 南側壁石積状態 |
| 図版 7 | a 有岡谷 1号古墳 須恵器 | |
| 図版 8 | a 城が谷住居跡 土師器・須恵器 | |

挿図目次

- | | | |
|-------|---------------|-------|
| 第 1 図 | 遺跡位置図 | -(3) |
| 第 2 図 | 遺跡付近地形図 | -(4) |
| 第 3 図 | 城が谷住居跡実測図 | -(10) |
| 第 4 図 | 城が谷住居跡出土遺物実測図 | -(12) |
| 第 5 図 | 城が谷 1号箱式石棺実測図 | -(15) |
| 第 6 図 | 有岡谷 1号古墳石室実測図 | -(18) |
| 第 7 図 | 有岡谷 1号古墳石室平面図 | -(19) |
| 第 8 図 | 出土須恵器実測図 | -(21) |
| 第 9 図 | 石斧実測図 | -(22) |

I はじめに

広島県山県郡千代田町は山県郡のなかでも一番多くの遺跡がある町であり、また、中国縦貫道が町内を通過し、そのインターチェンジが設置されることから、多くの工場やレジャーランドなどの建設が話題となっている町もある。したがって町内の遺跡の保存については、十分な注意がはらわれねばならなかった。

そうした状況のなかで、昭和46年6月18日、千代田町教育委員会より、同町有田において、広島市三棟町の石田工業株式会社が工場用地を造成中、箱式石棺が発見され、内部には人骨が残っているとの連絡をうけた。そこで、6月19日、広島県教育委員会は、早速指導主事伊吹尚を現地に派遣して踏査したところ、造成予定地内には、この箱式石棺以外に、もう1基の箱式石棺と、中国縦貫自動車建設予定地内の分布調査で確認していた有岡谷1号古墳が含まれていることが明らかになったので、2基の箱式石棺については、早急に遺跡発見届を提出されることと、これらの古墳の保存に十分な配慮をされるよう、石田工業株式会社社長石田渡氏に申し入れた。

さらにその後6月22日には課長補佐兼文化財第二係長西本省三、文化財保護主事河瀬正利と伊吹尚が再度現地におもむいて、石田渡氏に遺跡の保存を申し入れるとともに、千代田町長、同町教育委員会教育長に対しては、中国縦貫自動車道の建設とともに大規模開発の実施によって、埋蔵文化財包蔵地の破壊が予想されるので、その保存に対して町としても独自の対策を立てられるよう要望した。

その後、石田工業株式会社と当委員会の間で、これら遺跡の保存について協議を重ねたが、箱式石棺1基を除いては、その保存が困難であるとの結論に達し、当委員会はやむをえず発掘調査をして、記録保存の措置をとることとした。

発掘調査は石田工業株式会社より調査費630,000円の委託をうけた広島県教育委員会が主催し、昭和47年6月19日から6月30日までの11日間にわたって実施した。調査はつぎの4人が担当した。

伊吹 尚 広島県教育委員会事務局文化財保護室指導主事

松村 昌彦 タ

山県 元 タ

中 用 製

なお、発掘調査の期間中に、2か所の遺物散布地が発見されたので、これらの遺跡もあわせて調査したところ、そのうちの1か所からは方形プランの住居跡1戸を発見した。この結果、箱式石棺墓1基、横穴式石室墳1基、住居跡1軒の3か所を発掘調査することとなった。

調査にあたっては、石田工業株式会社、千代田町教育委員会、新藤久人氏（芸北民俗博物館長）の協力を得た。ここに厚くお礼申しあげる。 (伊吹 尚)

II 位置と環境

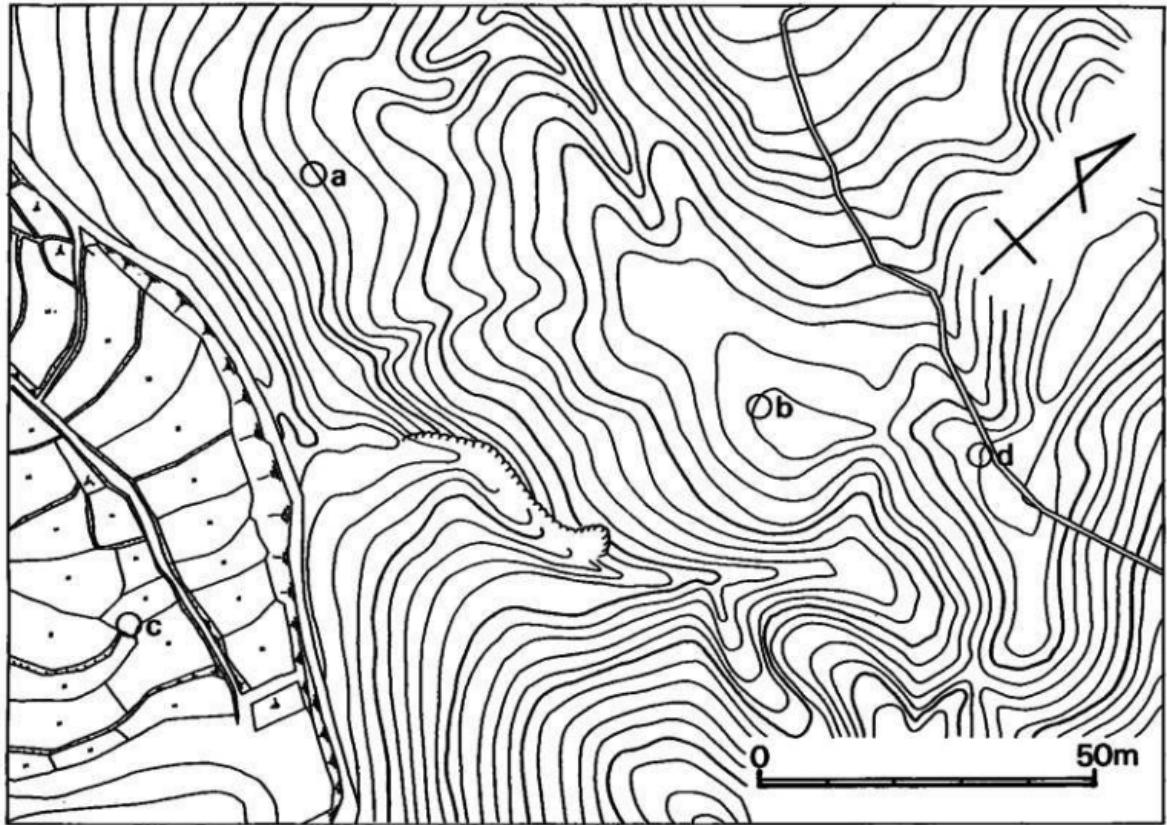
全国遺跡地図（広島県）によると、山県郡内には約150の遺跡が分布しているが、その大部分は古墳である。そのうちの約120の遺跡は千代田・大朝地方に分布していて、太田川上流の加計地方にくらべると、同じ芸北地方といいながらも、その分布に大きな違いがある。

この地方の古墳の特色については、いまだ分布調査や発掘調査がほとんど行なわれていない現在あきらかにすることは困難であるが、この地方は県内最大の古墳の分布地域である三次盆地を流れる江川の上流域にあたり、地理的環境のうえでは、三次地方を中心とする文化圏の辺境を形成する地域と考えられる。

千代田町内で行なわれた発掘調査としては、昭和33年の藏迫第2号古墳の調査があるのみで¹⁰、町内の約100基の古墳の実態を明らかにすることは非常に困難であるが、分布状況から当地方の古墳を概観すると、古墳が集中的に分布するのは、古保利から



第1圖 遷移位置圖(2甲)



第2図 通跡付近地形図
(a 城が谷住居跡 b 城が谷1号箱式石棺 c 有間谷1号古墳 d 城が谷2号箱式石棺)

春木にかけての丘陵上と、この丘陵をきざむ谷の谷頭付近である。これ以外の地域では、横穴式石室を主体とする古墳が3～5基分布するのが一般的である。

前者のなかでも、重要文化財に指定されている薬師如来坐像など弘仁時代の仏像群の残る福光寺跡の裏山では40基余りの古墳の存在が確認されている¹⁰。この古墳群は丘陵上に2基の前方後円墳をはじめ、内部主体が粘土構かあるいは堅穴式石室と推定される円墳からなっており、横穴式石室を主体とする古墳は少ない。このほかに、昭和13年砂防工事にともなって発見された丁保余原の國藤古墳では、箱式石棺内部より、鏡・勾玉・管玉などが発見されており¹¹、これらが当地方の古墳築造の先駆をなすものと考えられよう。

これらの古墳が広く平野を望む丘陵の頂上や尾根に築造されている場合が多いのに對して、横穴式石室を主体とする古墳は3～5基が、丘陵を樹枝状に侵蝕した谷底平野の谷頭付近や、丘陵ないし山地と谷底平野との傾斜変換線付近に立地するのが一般的で、前者ときわめて対照的な立地を示している。これら横穴式石室を主体とする古墳のなかでは、金銅製の蟹珠を出土した額田郡の三ツ塚古墳¹²や鉄地金張の雲珠が出土している本地の湯船谷古墳¹³などが当地方の横穴式石室の前駆的位置を占めるものと考えることができよう。

今回、我々が調査した2基の古墳と遺跡は広島県山県郡千代田町大字有田字城が谷および有岡谷にある。

現地は町内を北西から南東に流れる志路原川が古保利薬師のあたりで、流れを東に変える屈曲点の南西約1kmのところにあたっている。すなわちこの屈曲点付近から南西に延びる小さな谷があり、この谷はさらに一部は分岐して南東に延びているが調査した古墳・遺跡はいずれもこの分岐して南東に延びる谷頭付近にあり、有田城跡のある山の北側の麓に立地している。

また、この谷は谷頭において、比較的豊富な湧水がみられ、現在、この谷はこれを利用しての水田耕作が行なわれていることから推定してみて古代人にとっても良好な居住条件を提供していたと考えることができよう。 (伊吹 尚)

註 (1) 熊田重邦他「広島県千代田町藏迫第2号墳発掘調査報告」

(広島女子短期大学研究紀要第11号 1961)

- (2) 広島県教育委員会『中国縦貫道自動車道建設予定地内埋蔵文化財包蔵地分布図』（1971）
予定線を中心に幅 2 Km の分布調査で全国遺跡地図の遺跡数を上回る 120 の遺跡が確認されている。
- (3) 名田富太郎『山県郡史の研究』（1953）
広島県府市高等学校地歴部編『広島県古墳総覧第一巻』（1954）
名田氏によると鏡・勾玉・管玉・小剣出土とされているが「古墳総覧」によると勾玉 2、直刀 1、人骨 1 体分が出土したと報告されている。遺物は散逸して所在は不明である。
- (4) 頼田部の吉行彦氏が発見したもので、雲珠のほかにガラス製小玉も発見されている。
- (5) 湯船谷の島畠氏が開墾で横穴式石室を発見した際に発見されたもので、ほかに埴輪が出土している。古墳は全壇。

III 調査の経過

1. 発掘調査の経過

発掘調査は工場用地の造成にともない破壊される有岡谷1号古墳と城が谷1号箱式石棺について行なう予定であったが、発掘調査中にさらに2か所の遺物散布地が発見され、協議の結果、これらの保存は不可能と判断してあわせてその調査を実施した。

城が谷住居跡

城が谷1号箱式石棺および有岡谷1号古墳の調査中に、城が谷1号箱式石棺の西約75mの地点と有岡谷1号古墳の南方約40mの地点に弥生式土器、土師器、須恵器の散布することがわかったので、前者を城が谷1号遺跡、後者を城が谷2号遺跡と呼称することにした。調査の結果、1号遺跡からは住居跡が発見されたので、1号遺跡を城が谷住居跡、2号遺跡を城が谷遺跡と呼びかえることにした。

城が谷住居跡は城が谷1号、2号箱式石棺のある丘陵で、箱式石棺よりは下方の南側傾斜面で発見された。ここは、すでにブルトーラーによって、表土層が取り除かれしており、土師器片、須恵器片が散布する状態であった。また、採土によってできた南側の崖面に遺物包含層が観察されたので、南北に幅1m、長さ9mのトレンチを設定した。その結果、トレンチの西壁面に住居跡の床面が検出されたので、トレンチを拡張して、方形プランの住居跡1戸を検出した。

城が谷遺跡は黒フクのなかに、弥生後期の土器片、土師器片、須恵器片を包含していたが、採集した遺物がいずれも細片であること、ブルトーラーによって土層がかく乱されていたことなどから、この遺跡の性格を明確にすることはできなかった。

城が谷1号箱式石棺

工事中に発見された箱式石棺で、ここより東方約35mの地点に半壊の箱式石棺が発見された。前者を城が谷1号箱式石棺、後者を城が谷2号箱式石棺と呼称することとした。2号箱式石棺は保存されることとなったので、1号箱式石棺の調査を実施した。この石棺の蓋石はすでに発見当時動かされていたが、その時の話や封鎖用の粘土に残っていた蓋石の痕跡から、その配置状態を復元し、調査を行なった。内部からは人骨1体のほかには、何らの遺物も発見されず、また、石棺の周囲も相当かく乱され

ていたので、石棺構築のための掘り方も明確につかむことはできなかった。

有岡谷1号古墳

水田の畦跡に残された横穴式石室墳で、墳丘はもちろん天井石も取り除かれている状態であったので石室内部と石室を構築するための壙の調査を行なった。この古墳の東南に湧水を利用した溜池があり、ここからの漏水によって石室の床面がぬかるむことと、石室が黒フクの上に構築されていたことから、床面を適確につかむことができず、追葬の有無は明確にできなかった。石室内部よりは10個の坏蓋、7個の坏身、4個の増蓋、1個の平瓶が出土した。そのうち奥壁の近くで出土した坏蓋と坏身はいずれも底部あるいは頂部を上にして床面に敷いてあった。石室構築のための壙の状態を観察すると、石室は、北から南へゆるやかに傾斜する斜面に石室の主軸が平行となるように築かれており、また、奥壁近くは基盤が露出するまで掘りこまれているのに対して、羨道部あたりは旧地表面と推定される軟質の黒フクの上に構築されていることから、南側壁は羨道部付近が沈下していた。

(伊吹 尚)

2. 発掘調査日誌抄

1972年（昭和47年）

6月19日（月）曇

朝広島を出発し千代田町教育委員会に寄り調査の打ち合わせを行なった後、現場に向かう。

城が谷1号箱式石棺——昨年、工事中に発見されて以来、保存のため鉄条網が張られ、屋根が架けられていたので、それらをすべて取り除き清掃し、写真撮影をする。蓋石の実測にかかる。

6月20日（火）曇のち晴

城が谷1号箱式石棺——蓋石の実測を終え取りはずす。人骨は保存状態が良くほとんど完全に残っていた。清掃して写真撮影をする。

有岡谷1号古墳——草を刈り調査前の写真撮影をしたのち石室内の排土をはじめる。石室内に落ち込んでいる石を取り除き数10cm排土をすると、水がしみ出した。北側の御石下部より平盤が1点出土し、床面に近いことが推定された。封鎖石もみられるようである。

6月21日（水）晴

城が谷1号箱式石棺——石棺、人骨の実測を開始する。

有岡谷1号古墳——床面を追って排土を続ける。北側の御壁寄りに、須恵器の壺の身と蓋の一群が検出される。また石室内には疊がみられた。遺物の出土状態の写真を撮る。前庭部と奥壁の裏の掘り方の調査をする。

6月22日（木）雨

城が谷1号箱式石棺——テントを張って石棺内部の実測を行なったのち人骨を取り上げる。

6月23日（金）晴

城が谷1号箱式石棺——人骨を取り上げた後の石棺の写真撮影を行なう。その後石棺の掘り方の調査をはじめた。

有岡谷1号古墳——清掃の後、写真撮影をし実測にかかった。また石室掘り方の調査のため南北に横切るトレンチを設定する。

城が谷1号古墳がある尾根でもう少し西に下った地点の南側斜面に、土師器、須恵器の散布

するところがあり、崖面に黒色有機質土がみられたので、南北に9m×1mのトレンチを設定して調査をする。城が谷1号遺跡と名付ける。

6月24日（土）晴

有岡谷1号古墳——石室の平面、断面の実測を終え遺物を取り上げる。

城が谷1号遺跡——トレンチの壁面を觀察したところ住居跡の床面と思われるところが検出されたので、西側に拡張する。住居跡は方形をなし床面上には板などがみられた。住居跡が発見されたので、以後この遺跡を城が谷住居跡と呼ぶこととした。

6月26日（月）曇のち雨

有岡谷1号古墳——石室の実測を続ける。

6月27日（火）雨のち曇

有岡谷1号古墳——実測を続ける。

城が谷住居跡——トレンチの西壁の実測を行ない平板測量をする。トラバースの開角を行なう。

6月28日（水）晴

有岡谷1号古墳——実測を完了する。

城が谷住居跡——住居跡実測のため造り方を設定する。

遺跡の遠景写真と住居跡の写真撮影を行なう。トラバースの各点、水糸のレベル測量を行なう。

6月29日（木）小雨

有岡谷1号古墳——写真撮影のために石室内の清掃を行なう。石室の掘り方を調査する。

城が谷住居跡——住居跡の実測を行ない土器を取り上げる。

6月30日（金）晴時々雨

有岡谷1号古墳——掘り方の平板測量を行なう。

城が谷住居跡——清掃の後写真撮影を行なう。本日で調査を完了し、機材を点検してひきあげる。

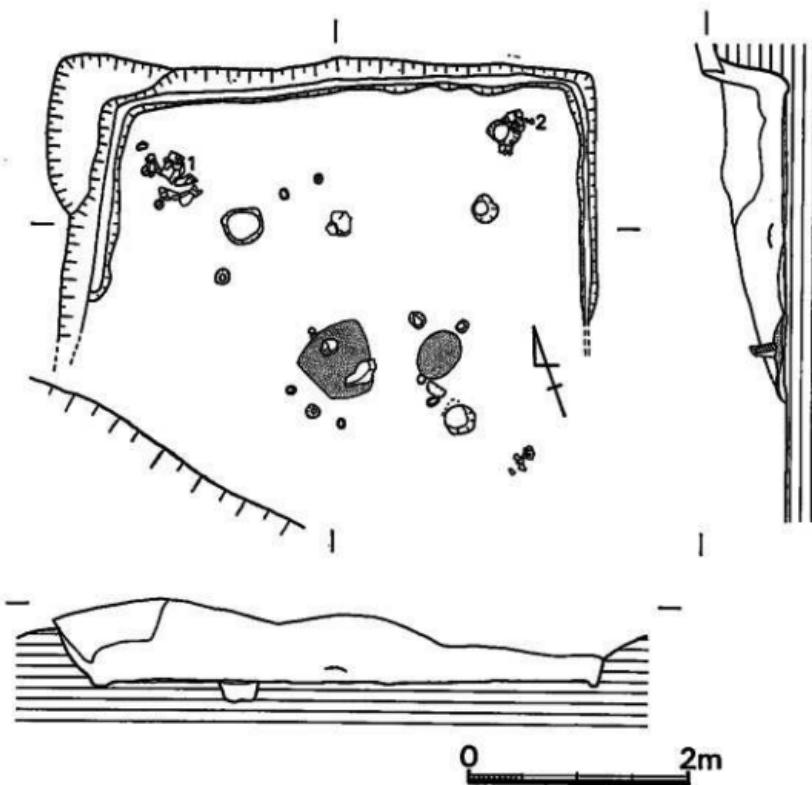
(中田 昭)

IV 調査の遺跡

1. 城が谷住居跡

住居跡の位置

本住居跡は有田城跡から北東に延びる尾根が途中分岐して、北西に延びる丘陵の南側緩傾斜面に発見された。同じ丘陵の東方約75mの尾根上に城が谷1号箱式石棺が、同じく東方約110m尾根上には城が谷2号箱式石棺があり、東南東へ約110mの水田中には有岡谷1号古墳が、谷をはさんで南側の丘陵には有岡谷2号古墳がある。住居跡の前面の谷は、谷頭の湧水を利用する棚田水田となっている。



第3図 城が谷住居跡実測図（1箇、2箇、あみ目は焼土）

住居跡の現形

本住居跡周辺の表土層はすでにブルドーザーによって削平されており、付近には土師器、須恵器の破片がかなり散布していた。また、南側の採土によってできた崖面には暗褐色の有機土層がみられ、遺跡存在の可能性を示していたことから、丘陵の尾根に直交するように、南北に9m×1mのトレンチを設けて、発掘調査を行なった。

このトレンチの西壁を観察すると、表土層はすでに削平されていて明らかにはしがたいが、現在の最上層は固い黄褐色粘質土で、その下に暗褐色土層がある。これらの土層からは土師器片、須恵器片が出土するが量は少なかった。この2つの土層はトレンチの南端付近では観察されない。この下に、褐色土層がある。この層は木炭の細片を含み、土師器の包含層となっていた。この下は黒色土層で、この黒色土層を断ち切るような形で住居跡の床面が観察され、この層の上面が住居跡を掘り込んだ時期の地表面と推定される。

堅穴式住居跡の大部分は地山まで掘り込んでいるが、地山が東南方向に傾斜して低くなっているため東北寄りの部分では、当時の表土層と推定される黒色土を若干掘りくぼめて、その上に地山の土を敷いて床としていた。南寄りの部分では、地山面はさらに低くなってしまっており黒色土層の上に褐色土を盛土してその上に地山を削った土を敷いて床面としていた。

住居跡は、方形プランの堅穴式住居跡、北壁と東、西壁の一部が残っていたが南壁については、工事により破壊されており明らかにできなかった。しかし床面の東南寄りの部分の作り方からすると、南壁は当初からほとんどなかったのではないかと考えられる。

住居跡の東西長は約4.9mで、南北長は詳らかにしがたいが、柱穴の位置から考えると4.5~4.7mと推定され、面積は約23m²のはば正方形に近いプランが考えられる。壁の下には、幅約20cm、深さ約5cmのU字状の側溝がある。柱穴は3か所が発見されたが、南西の1か所は発見できなかった。柱穴の径は25~35cm、深さ20~45cmで、柱間は約2mをはかる。

床面上には、炉跡と推定される焼土が2か所検出された。1か所は径約40cmの範囲で東南の柱穴近くに、もう1か所は、中央部やや南寄りに、径約70cmの範囲に拡が

り、この上に2個の角礫が立ててあったが、火熱をうけた痕跡のみられないことから、炉にともなう施設とするにはやや疑問が残る。

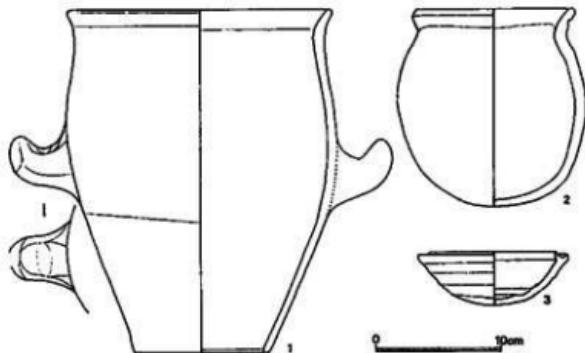
床面上の遺物は、北西隅に傾が、北東隅に小形の壺が、南東隅に甕が、北西の柱穴と北東の柱穴のほぼ中間に甕があった。前三者はいずれも床面に密着しており、四隅におかれていたものようである。最後者は床面より10cm余り高い位置にあった。

出土遺物(図版8, 第4図)

住居跡の床面からは4個体分の土師器が検出されたが、うち2個体は甕の胴部の破片で器形を明らかにすることはできない。

瓶(第4図1) 住

居跡の北西隅の床面から検出された。口縁部径21.2cm、底部径10.7cm、器高27.5cmで、最大径は口縁より9.6cm下のところにあり、21.5cmをはかる。胴部両側に長さ4.5cm、幅3.7cm、厚さ3cmの把手があり、口縁部はやや外反する。淡い黄褐色を呈し、石英粒をかなり含み、焼成はあまりよくない。



第4図 城ヶ谷住居跡出土遺物実測図

壺(第4図2) 住居跡北東隅の床面より検出された。口径は11.5~12.5cmのややいびつな長円形をなしている。頸径は約11.8cm、器高15.9cm、最大径は口縁より7.5cm下のところにあり、15.1cmをはかる。張りの弱いやや長めの胴部で、底は丸底である。口縁部はやや外反し、口縁部の内外面には刷毛による調整痕があり、外面にはヘラによる幅3mm程の沈線が周囲ほどめぐらされている。胴部内面はヘラで下から上に向けて調整がなされている。茶褐色を呈し、石英粒を少し含み、焼成は良好である。

その他、住居跡櫻土からは土師器片、須恵器片が出土したが完形となるものは須恵

器坏身 1 点のみである。

坏身（第4図8） 最上層の黄褐色土層より出土したもので、焼成はあまく、灰白色を呈している。口径10.1cm、器高4.2cmで、蓋受け部は低い。

広島県内においては、堅穴式住居跡の発掘調査例は少なく、古墳時代の住居跡としては、本住居跡のほかに三次市十日市町の日光寺1号～3号住居跡、比婆郡口和町の常定峯双住居跡、府中市用土町の大久保北住居跡、福山市津之郷町ザブ遺跡の住居跡の7例があげられるにすぎない。

府中市用土町の大久保北住居跡は楕円形プランで、中央に炉跡があり古式の土師器が出土している^①。三次市十日市町の日光寺1号住居跡は方形プランで北壁中央部に炉跡があり、土師器のみ出土している。2号住居跡も1号住居跡と同じ構造で、土師器と須恵器が少量出土している。3号住居跡は1・2号住居跡とはほぼ同じ構造で土師器、須恵器が出土しているが、須恵器の量が多いと報告されている^②。比婆郡口和町常定峯双住居跡と福山市津之郷町ザブ遺跡の住居跡は、いずれも隅丸方形のプランで土師器、須恵器が出土しており、常定峯双住居跡は出土の須恵器から6世紀後半から7世紀初めの時期が推定されている^③。

これらのことから考えると、大久保北住居跡が最も古く、ついで日光寺1号・2号・3号住居跡と続き、それに常定峯双住居跡が続くという編年が考えられる。以上の例にもとづいて、本住居跡の時期を推定するならば、方形のプランをもち、床面からは土師器のみが出土しており、また炉跡も床面のはば中央に位置することなどからみて日光寺1号住居跡に併行あるいはやや先行する時期のものと考えられる。

(山県 元)

注 (1) 広島県立府中高等学校地歴部「府中市大久保遺跡のスライド解説」

(『芸術文化12・13合併号』1958)

タ 「学校博物館絵はがき第六輯」(1961)

(2) 松崎泰和「古代農村の復元」(大学人会研究論集『広島の農村』1955)

(3) イ 広島県教育委員会「広島県文化財調査報告第7集」(1967)

ロ ザブ遺跡の住居跡は1971年に広島県教育委員会が発掘調査した。

2. 墓が谷1号箱式石棺

位 置

石棺は千代田町大字有田字城が谷165番地にあり、標高332.5m、付近の水田からの比高約20mの丘陵尾根上に位置している。丘陵は東から西に向かって傾斜しているが、石棺のあるところはやや平坦な場所で、その突端部にあたっている。石棺は1基だけ孤立しているが、同じ丘陵上で東方約35mの丘陵のつけ根のところには城が谷2号箱式石棺がある。

墳丘と外表施設

石棺は工場用地の造成工事中に発見されたもので、周囲はブルドーザーによって削平されており、盛土その他外表施設は明らかではなかった。しかし、地山を直接掘り込んで石棺を構築していることや付近の地形からすると、盛土はほとんどなかったとみてよかろう。

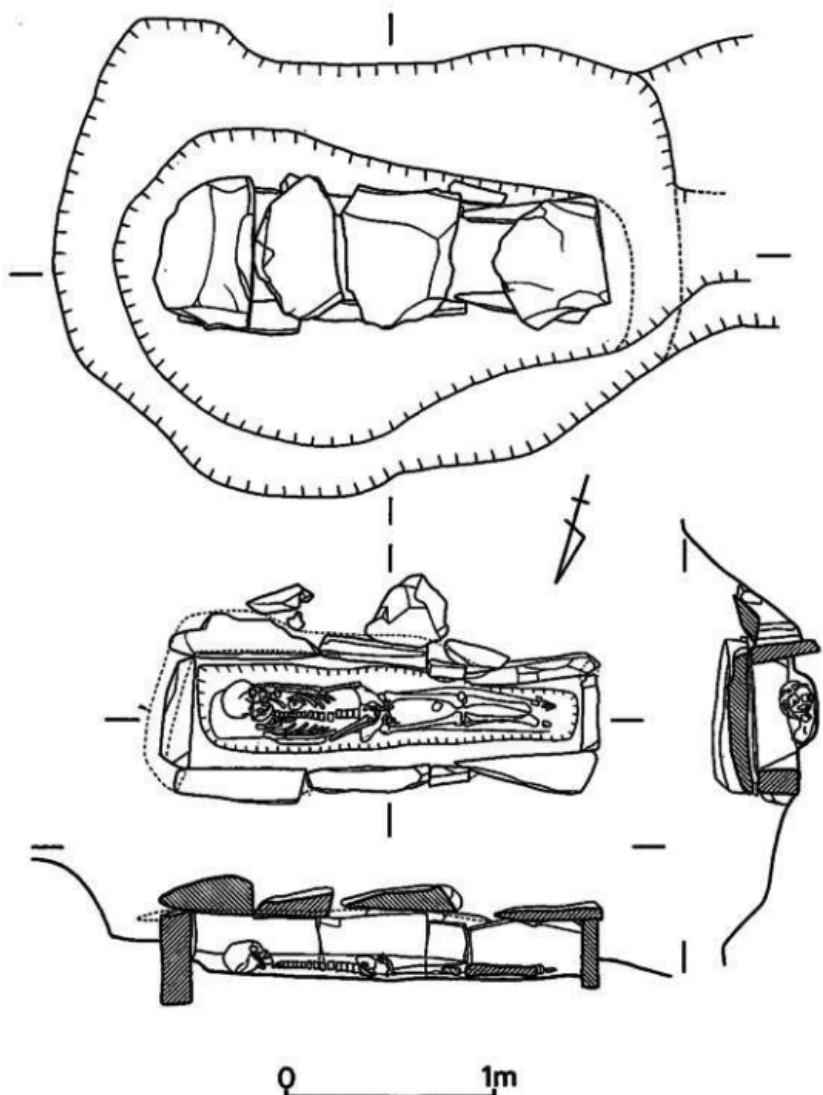
内部主体

石棺は造成工事中に発見されたとき、蓋石の一部は動かされたため、蓋石の原位置は明らかでないが、発見者の話と、側石や小口石の上の粘土に残された痕跡から、ほぼ当初の状態を復元することができた。現存する蓋石は4枚あるが、頭部から3枚目と4枚目の間にあたるところは、あまりにも間が開きすぎているので、間にもう1枚の蓋石があったものとみられる。蓋石はすべて花崗岩で、頭部の1枚のみ丸味をもった河原石を使用し、他は割石を使い、頭部と他の部分とを区別している。

このことは、後述する側石においても、頭部の両側のものが大きさ、幅ともに大きな石を使用していることと一致し、特に頭部は足部よりも意識的に丁寧につくられていることがうかがえる。

蓋石の形は一定していないが、大きさはほとんど同じで、頭部から順に、73×47cm、71×43cm、69×57cm、63×57cmを測る。厚さは頭部のものが19cmで最も厚く、足部のものが7cmで最も薄い。蓋石の表面は凹凸が激しいが、石棺の内側にあたる部分は平たく整形されている。蓋石と蓋石との間隙は比較的大きく、石棺の周辺に散乱していた小礫で、この間隙を埋めていたらしい。さらに、蓋石や側石に付着している粘土から推察すると、蓋石相互の間隙、蓋石と側石との間隙、側石と側石の間隙に粘土をつ

めて石棺の密閉度を高めたものと思われる。



第5図 城が谷1号箱式石棺実測図（破線内は粘土）

石棺は尾根の主軸に平行につくられ、尾根の高い方向に頭を置いている。N 75° E に主軸をもち、長さは内法で187cm、幅は頭部で53cm、足部で35cmである。側石はどちらも4枚づつあり北側のものは頭部より順に長さ62cm、58cm、19cm、68cm、南側は、長さ71cm、52cm、18cm、64cmを測る。頭部から8枚目のところはどちら側も非常に小さく、しかも地山に深く埋められておらず、あたかも後から補足したかのように思われ、ちょうどこの上にあたる蓋石が小さいものが使用されていたらしいことと対照的である。またこの側石は、北側では頭部から4枚目の側石が内側に入り込んで重なって3枚目の側石を支えており、南側では頭部から4枚目との間に外側にもう一枚石があてがわれている。石棺内の深さは23~25cmであるが、南側の3枚目の側石と、北側の2枚目と3枚目の側石を除いて側石は更にそれよりも12~16cmばかり深く埋め込まれている。南側の頭部を除く3枚の側石は内側に若干傾いているが、これは土圧のために本来は垂直に据えられていたものであろう。小口石は両側とも側石の内側に組まれているが、あまり深く入っておらず、小口石の内側の角と側石の内側の角がほとんど合わさるように構築されている。

石棺内の人骨は仰臥伸展葬で、身長は160cm前後と思われる。頭は若干左に向け、左上肢は体側に置き、右上肢は体の前に置いている。頭部には朱が塗られている。

棺床は人骨のある部分のみ長方形に地山を深さ約5~10cmぐらい深く掘り込んでいる。しかし、棺床は頭部から足部にかけてやや傾斜しているので、掘り込みは頭部の方が深く、足部ではほとんどわからなくなっている。

棺内から出土したのは、人骨のみで、それ以外に副葬品は全く発見されなかった。石棺構築のための掘り方は、発見時に相当かく乱されており、築造当初の形は明らかにしがたいが、東側と南側は比較的よく残っておりのことからすると、掘り方は石棺に合わせて長方形に傾斜をもって掘られ、側石や小口石のところは更に深く掘り込まれていたと思われる。足部の方は土が流れていて明らかでないが、頭部の方は蓋石の上端は地表よりも1~2cmばかり深いところにあり、地表まで埋土をしても、石棺は地表外には出ない状態であったといえる。

城が谷1号箱式棺については、棺内より人骨が出土したのみで、その時期を推定す

るに足る資料はえられなかつたが、一方の小口が細められるというプランをもち、被覆粘土が使用されていること、掘り込みの形状などについては、可愛川の下流土師地区で調査された新開1号・2号箱式石棺と共通点がみられるので、前半期の古墳とみてよからう¹⁾。しかし、側石は頭部と足部に長い石材を使い、その間には短い石材を利用している点、遺体を安置するために、棺床を長方形に掘り込んでいることなどについては異なる点をもつてゐる。これらの相違が築造時の単なるクセによるものか、被葬者の性格、あるいは地域的・時期的相違によるものかは今後検討されなければならない問題である。

(中田 昭)

註 (1) 土師埋蔵文化財発掘調査団『土師』(1970)

3. 有岡谷1号古墳

位 置

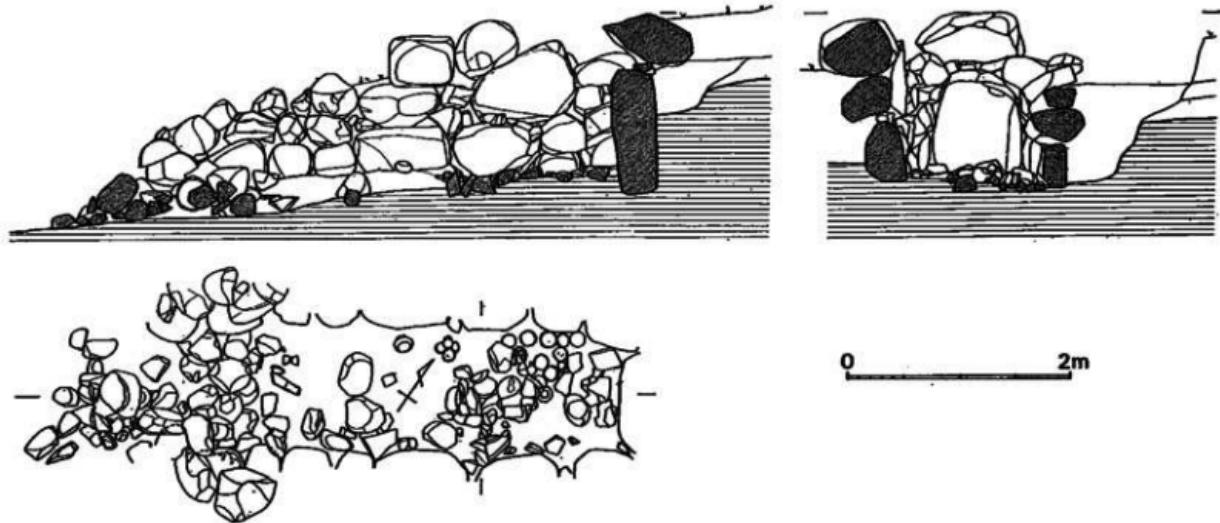
本古墳は千代田町大字有田字有岡谷にある。

有田の集落から西に小さな谷が入り、さらにこの谷の一部は分岐して、南東にのびている。この谷は谷頭付近まで、湧水を利用して水田となっている。古墳は南東にのびる谷の谷頭付近の水田のなかに、わずかに石積みが残っていたことより確認されたものである。本来は谷に突出する微高地上に築かれたらしい。

本古墳の西の丘陵斜面には、有岡谷2号墳があり、東方の丘陵尾根上には城が谷1号、2号箱式石棺が北方の斜面上には城が谷住居跡が存在する。

現状と外表施設

古墳の周辺はすべて水田となっていて、古墳のある場所のみ荒地とし放置されて、墳丘はもちろん天井石もすでに失なれて、側壁や奥壁の一部が露出していた。石室内には天井石、側壁に使用されていた石材、マサ土、黒フクなどが充満していた。したがって、墳丘の規模、外表施設としての葺石や周濠などの存在は確認できなかつたが、北側壁の先端から北に約1.5mの間に長さ60cm前後の3個の石と、それよりやや小さめの石1個が墳丘裾部に沿って置かれたような状態にあった。しかし、この部分は水田と荒地の境界にもあたり、また南側にはこのような施設のないことから、これを墳丘裾部を区画する列石とするにはやや疑問がある。



第8圖 有閭谷1号古墳石室実測図

石室を構築するための壙は北から南へゆるやかに傾斜する斜面を、壙の主軸が北東—南西方向になるように掘り込んでいる。壙は奥壁背面より85cmのところから、約60度の角度で40cm下へ掘りこんで、南西に傾斜する平坦面を作っているが、壙底は石室床面より75cm高く、また奥壁下端は石室床面より約15cm低い位置にある。さらに、奥壁内面より1.25mのところでは、南側壁から約1m、北側壁から約1.6mのところから、掘り下げているが、南側壁から約50cm、北側壁から約1.4mのところから、さらに深く掘り下げて、石室床面とはほぼ同一レベルの平坦面を作っている。このことから推察すると、石室の構築にあたって、まず長軸約5.2m、短軸約4.7mの隅丸方形に近い平面の壙を作り、ついで長軸約4.7m、短軸3.8mの壙を作つて2段掘り込みにしている。壙は基盤上にある黒褐色土層—古墳構築時の表土層と推定される—より掘り込まれているが、石室中央部より入口寄りでは、基盤まで掘り下げてなく、石室の入口付近についてみると南側壁は軟弱な黒褐色～黒色土上に、北側壁は黒色土上に若干の盛土をして、側壁を積み上げており、南側壁はかなり沈下していた。

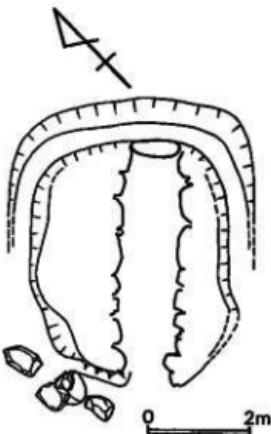
なお、石室の主軸は壙の主軸に対して、東南に偏して、両者は平行の関係にある。

石室の構造

石室は側壁と奥壁の上部および天井石の部分がすでに失なわれているために、石室上部の状態を明確にとらえることはできない。石室の全長は北側壁で4.2m、南側壁で4.4mをはかり、幅は奥壁で0.9m、中央部で1.1m、封鎖石の部分で1.05m、石室端部で0.9mをはかり、やや洞の張るプランをなし、その主軸は北55°東である。

奥壁は長さ1.1m、幅90cm、厚さ40cmの丸味のある石を2段に掘られた壙に背面を密着させてて、この上に割れた面が斜めになって石室内に突き出した状態で石がのっているが、本来は割れた面が垂直になるよう置かれたものと考えられる。とすると、奥壁の高さは床面より1.5m以上あったと推定される。

側壁は北壁、南壁ともに3段の積石が残っていて、



第7図 有間谷1号古墳石室平面図

現存の最高は北壁で床面より1.4m、南壁では1.15mをはかる。北壁最下段は8個、南壁最下段は9個の石からなり、割石を使った部分もあるが全体的には丸味をおびた石を積んでいる。北壁についてみると奥壁から2.8mのところから東側、すなわち奥壁寄りでは、長さ50~80cmの大型で長めの石を積んでいるのに対して、西側では40cm内外の小型で丸い石が使われている。南壁についてもほぼ同様で、積石によって玄室と漠道を区別したのではないかと推定される。

床面は溜池からの伏流水がたえず流れこむために明確にとらえることが困難であった。奥壁から約1.5m東のところまで、敷石かと思われる小型の石がほぼ同一レベルであったが、小さな角礫や平たい石、丸みをもつて大部分は面が不揃いでたてに入っていたり、斜めの状態のものも少なくなく、敷石か、側壁のこめ石が落下したものか判別しがたい。奥壁より約2.8m東に約30cmの比較的大きめの石が2個並んでいて、前述のごとく、側壁の積み方もここで変化することからすると、あるいは玄室と漠道を区画する施設かも知れないがここから東の側壁にはこれらの石と同じような大きさの石が多く使用されており、偶然にこの位置に転落したこととも考えられるので断定はできない。またこの付近から南壁は黒フク上に積み上げられているために沈下しており、両側壁の下端を結ぶ線を床面とすると、床は北壁から南壁にむかって傾斜しており、この石の付近と北壁下端では約20cmの差があり、南壁直下ではその差は25~30cmにもなっている。また入口にむかっても傾斜しており、封鎖石の部分では約30cmの差がある。

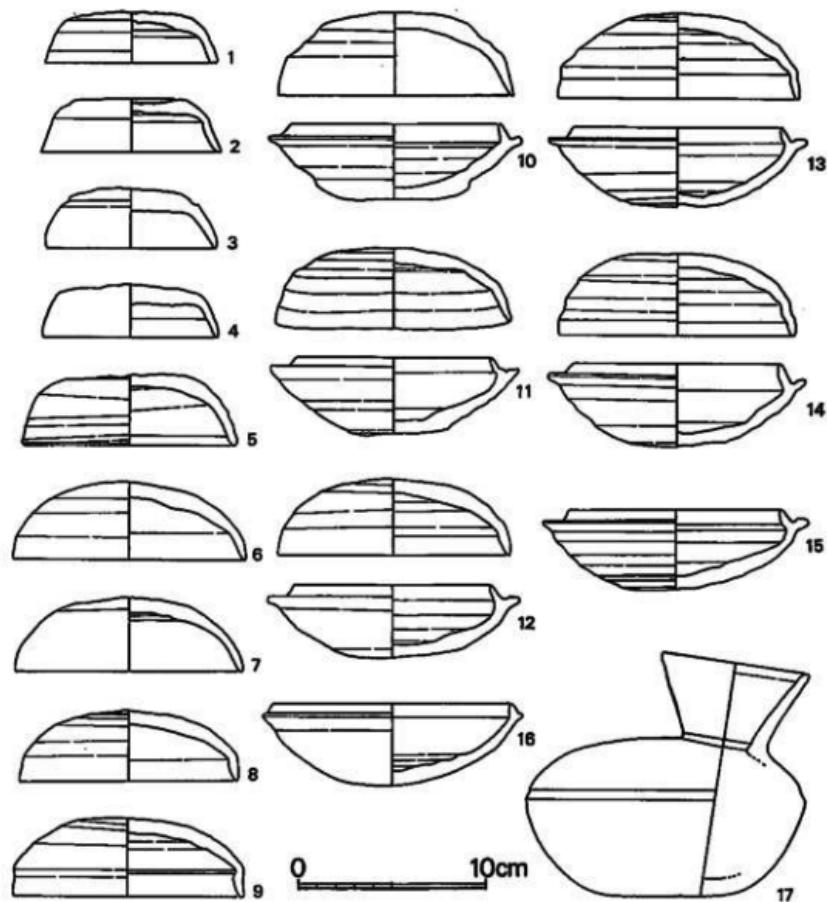
封鎖石は奥壁より東へ3.2mのところから3.8mのところまでの間に遺存している。径15cm~30cmの丸味のある石を乱積みしたもので、両側壁に密着させ、約50cmの高さで2段の積石が残っていた。また、この前面には、封鎖石が転落しており、本来は天井石まで積み上げられていたと思われる。

石室の構築に使用された石材は、付近の水田の中や畔に同じような形、質の石が露出していることから、この谷の中から集めたものであろう。

出土遺物（図版7、第8図）

石室床面より出土した遺物は北壁に沿って置かれている須恵器のみで、鉄製品、玉類などはまったく出土しなかった。石室は天井石および側壁を失なっているが、採石

に際して床面は余りかく乱されたとは考えられないで、玉類の副葬はされなかつたのであろう。また、鉄製品は床面が水びたしになる状態では、副葬されていたとしても、遺存は困難であろう。出土した須恵器は奥壁より80cm東と1m東の間で、北壁より75cm南の範囲に坏蓋7と坏身6が、坏蓋は頂部を、坏身は底部を上にして置かれていた。奥壁より約1.5m東には、増蓋4と坏蓋1がいずれも内側を表にして置かれており、ここより約40cmのところでは、平瓶が反転した状態で出土した。さらに、北壁



第8図 出土須恵器実測図

より2.9m東からは壺身1が出土した。出土状況からすると、壺蓋・壺身のグループと壺蓋・壺蓋のグループは原位置を動いていないものと考えられた。平瓶は原位置を知ることはできないが現在の場所にはほぼ近い位置に置かれていたものと考えられる。単独で出土した壺身については明らかにしがたい。このほか石室覆土中より磨製石斧や土師器片、須恵器片が出土している。また、石室構築のための壙内の埋土や壙の南西部の黒フクのなかから須恵器の細片が出土している。

壺蓋（第8図1） 口径9.1cm、高さ8.1cmで、内外面に水ひきの痕が残り、頂部はヘラ削りがなされている。身受け部は直線的に広がり、口唇部はいくぶんへこみかけんの平面をなす。灰白色を呈し焼成は良好である。

蓋（第8図2～4） 2は口径9.6cm、高さ2.8cmで頂部はヘラによる調整のためにややくぼんでいる。身受けの部分は外反しており全体に薄手である。灰白色を呈し、焼成は良好で、おもての一部には自然釉がかかっている。3は口径9.1cm、高さ8.2cmで、身受けの部分は45度に近い角度で直線的に外に広がる。頂部は厚さ1.2cmで身受けの部分より厚みがある。内外ともきれいに調整され頂部は平坦に近い。頂部より身受けにかかる部分に浅い沈線を一条めぐらしている。灰青色を呈し焼成は堅敏である。4は口径9.2cm、高さ2.8cmで、身受け部はやや外に広がる。暗灰色を呈し、焼成は堅敏である。

壺蓋（第8図5～9） 5は口径11.2cm、高さ3.7cmで、内外面に水ひきの痕をよく残している。頂部は平坦に近く、身受け部は丸みをもって広がっていく。灰白色を呈し、焼成は良好である。6は口径12.3cm、高さ4.1cmで、半球状を呈して身受け部が外に広がる。灰白色を呈し焼成はあまり良くなく、土師器に似た感じをうける。7は口径12.0cm、高さ3.9cmで半球状を呈し、身受け部が外に広がっている。灰色を呈し焼成は良好である。8は口径11.5cm、高さ3.8cmで丸みをおびた天井部は身受け部と明確に区別される。身受け部は垂直に近くなっている。全体に灰白色を呈するが、外面はそれよりもやや黒みをおびる。焼成はあまり良くない。9は口径12.2cm、高さ4.1cmで天井部と身受け部の区別は明確である。身受け部は外反ぎみで直立する。灰白色を呈し、焼成は良くない。

蓋付壺（第8図10～14） 10の蓋は口径12.6cmで天井部はヘラ整形により特に段状

をなす。身受け部は直線的に鋭い状態で広がる。外面頂部付近は褐色で身受け部では黒色を呈している。焼成はあまり良くない。身は口径12.2cm、高さ4.1cmでやや厚手である。底部はヘラ調整によりとくに段状をなしている。灰白色を呈し、焼成はあまり良くない。11の蓋は口径12.5cm、高さ4.3cmで内外に水ひきの痕が著しい。身受け部分は焼きひづみがある。淡灰色を呈し、焼成は良好である。身は口径12.3cm、高さ4.1cmで蓋受け部は他のものよりやや内傾を強くする。底部はやや平坦にヘラ調整されている。底部からの立上りは直線ぎみで水ひきの痕をよく残す。淡灰色を呈し、焼成は良好である。12の蓋は口径12.3cm、高さ4.0cmで天井部は丸みをもち、身受け部はやや外反する。灰白色を呈し、部分的に黒くなっているところがある。焼成はあまり良くない。身は口径10.5cm、高さ3.8cmで蓋受け部は内傾している。灰白色を呈し、焼成はあまり良くない。13の蓋は口径12.8cm、高さ4.5cmで天井部は丸みをおびている。身受け部はやや外反りになって直立する。灰白色を呈するが、ところどころ黒味をおびている。焼成はあまりよくない。身は口径12.5cm、高さ4.3cmで、厚みは0.5cmとほぼ一定している。蓋受け部はやや薄手で内傾している。灰白色を呈し、焼成はあまり良くない。14の蓋は口径12.4cm、高さ4.4cmで、水ひき痕をよく残す。身受けの中ほどがへこみかげんになって外反りのような状態で広がる。灰白色を呈し、ところどころ黒くなっている。焼成はあまり良くない。身は11.0cm、高さ4.4cmで、蓋受け部は直線的に内傾している。淡灰褐色を呈し、焼成はあまり良くない。

坏（第8図15・16） 15は口径11.8cm、高さ4.2cmで、内外に水ひきの痕をよく残す。蓋受け部は内傾している。淡灰褐色を呈し、焼成はあまり良くない。16は口径12.6cm、高さ4.4cmで、底部の厚さは0.7cmと薄手である。蓋受け部は小さく立上っている。黒褐色を呈し、焼成はあまり良くない。

平瓶（第8図17） 口径7.8cm、器高12.3cm、胴部最大幅14.8cm、口縁部の立上りは4.5cmで大きく外反している胴部の最大幅は底部より5.1cm上のところにあって、この部分に太い沈線が一条めぐっている。また胴部の張りは椭円形に近い。灰色を呈し、焼成は良好で、胴上部や口縁部には自然釉が一部かかっている。

本古墳の墳丘はすでに削平され天井石もすでに運び出されており、その規模を明確

にすることはできないが、石室はゆるやかな斜面に築かれており、使用された石材、現存の石室の長さ、幅などからすると、墳丘の径も高さもそれほど大きなものではなかったであろう。

床面にはおそらく敷石はなかったと考えられる。石室中央部近くで検出されたあたかも石室を玄室と羨道に区画しているかのような石の性格については今後の調査例にまちたい。

石室と石室構築のための壙との関係についてみると、壙はあきらかに2段掘りにしており、その壁をもって奥壁の背後をささえている。奥壁と南壁についてみると、南壁最下段で奥壁に一番近い石はちょうど2段目の壙の壁にぴったりと背後を合せており、南壁の石を先に据えて、奥壁の石をこの石に密着するように据えたと考えられる。また、本石室の特色は風化して丸味をおびた石材をそのまま使用していることである。このような石室は本県では他に類例がなく、判断の材料に乏しいが付近にみられる石材をそのまま使用していることは石室構築にあたって相当手をぬいた工法であるといえる。

出土した遺物は、奥壁近くから出土した蓋付壙のグループと、北壁寄りの埴蓋・壙蓋からなるグループ、それに単独で出土した平瓶・壙身がある。奥壁近くの蓋付壙のグループはいずれも頂部あるいは底部を上にして、床面に敷いた状態であったのに対して、北壁よりの埴蓋・壙蓋のグループはすべて内側をおもてにして積んでいるのとは明らかに異なる。埴蓋・壙身を伏せて床面に敷いた例は双三郡三良坂町の植松1号古墳^④、庄原市木戸町の中大平古墳^⑤に類例があり、その性格、これらの古墳と関係については今後検討されなければならない問題である。

奥壁に近い蓋付壙のグループを壙蓋についてみると、身受け部が直立するかそれに近いものと、身受け部が外にはりぎみのものとに大別できる。前者には8・9・13が、後者には6・7・10~12・14がある。本古墳に近い高田郡八千代町土師の調査例によると^⑥、形態的には前者がやや先行するタイプと考えられるが、7と11を除いては、いずれも灰白色を呈し、一部に黒色の部分があり、同じ焼成と胎土であり、器面の調整や色調もよく似ていること、出土の状況から、同一の窯で、同時の焼成によったとみることができる。壙身は10~15と16では、形態、出土の位置が異なり、16は

やや新しいタイプのものと考えられ、2次にわたる埋葬の可能性がある。

本古墳ではこれらの环類が数量的にも多く、いずれも蓋受けをもつ环であることからみて古墳の築造は6世紀後半の新しい時期とみることができる。（松村昌彦）

註 (1) 1972年、広島県教育委員会が発掘調査した。床は碌床で、横瓶、壺の破片を敷き、その上に环蓋、环身を伏せてならべ棺床としていた。

(2) 1972年、広島県教育委員会が発掘調査した。床面に壺の破片を敷き、やはり环蓋・环身を伏せてならべている。

(3) 土師埋蔵文化財発掘調査団『土師』(1970)

V ま　と　め

山県郡千代田町は先述のように、数多くの遺跡が存在する町であるが、その分布調査も十分でなく、まして発掘調査はほとんど行なわれていない状態で、ただちに今回調査した遺跡の位置づけをなすことは非常に困難である。しかし、当地方の古代史を解明する手がかりの一端をつかむことができた。以下、その問題点をあげてまとめたい。

城が谷住居跡について

本住居跡は城が谷1号箱式石棺、有岡谷1号古墳の調査にともなって、偶然発見されたもので、県内の数少ない古墳期の住居跡調査例に1例を加えることができた。県内の古墳期の住居跡で発掘調査がなされているのは、本例のほかには府中市用土町の大久保住居跡¹⁰、三次市十日市町の日光寺1号～3号住居跡¹¹、比婆郡口和町の常定峯双住居跡¹²、福山市津之郷町のザブ遺跡の住居跡¹³、住居跡の可能性が強いとされ、庄原市本村町の鏡寄遺跡¹⁴を入れても、8例にすぎない。

大久保住居跡、鏡寄遺跡からは古式の土師器が出土しており、古墳時代の前半期に比定されるものである。本住居跡とほぼ同時期と考えられるのは、日光寺住居跡、常定峯双住居跡、ザブ遺跡の住居跡であろう。これらの住居跡はいずれも $\frac{1}{4} \sim \frac{1}{6}$ 程度が残っているのみであるが、日光寺2号住居跡は1辺4mの方形プラン、同1・3号住居跡は1辺4.5mの方形プラン、常定峯双住居跡は1辺4.3m以上の隅丸方形プラン、ザブ遺跡の住居跡は1辺4.2mの方形プランで、本住居跡とほぼ同様の規模をもっている。日光寺住居跡、常定峯双住居跡はいずれも北壁の部分で炉跡が発見されているが、本住居跡ではほぼ中央部に炉跡と考えられる焼土がある。出土遺物については、日光寺1号住居跡からは底部を欠いた壺など土師器のみが2号住居跡からは壺・壺・甕などの土師器と須恵器の壊が出土しているが、須恵器の量に比べると土師器の量が圧倒的に多い。これに対して3号住居跡からは土師器の出土量に比して須恵器片の量が多く1・2号に比べてやや新しいものとすることができる。常定峯双住居跡では、土師器壺と須恵器の高壊が出土しており、ザブ遺跡の住居跡からは須恵器が出土している。これらのことからすると、土師器のみが出土した本住居跡の年代は日光寺

1号住居跡と同時期とすることができよう。

城が谷1号箱式石棺について

本県における箱式石棺は副葬品が皆無の場合が多く、時期的な判断をする手がかりがない。本例もその一つであるが、千代田町においては昭和13年に国藤箱式石棺から鏡・勾玉・鉄刀が出土した例がある⁶⁾。これらの遺物は現在散佚してしまって、出土の鏡が船載品か鐵製品か、またその鏡式をも明らかにすることはできないが、その副葬品の組合せからすると5世紀代を下らないものと考えられる。本箱式石棺についても千代田町の他の箱式石棺や土師地区の箱式石棺と類似する点が多いことから考えて前半期の古墳と考えられるので、有岡谷1・2号古墳に先行するものと考えてさしつかえあるまい。

有岡谷1号古墳について

本古墳は発掘調査時には、すでに墳丘はもちろん、すべての天井石、側壁の一部を失なって、全体の姿を明らかにすることはできなかったが、残存していた石室の基底部から全体をうかがうことができた。しかし、湧水によって床面の状態はきわめて悪く、追葬の有無を明らかにすることはできなかった。

まず、古墳の在り方であるが、この谷には本古墳のほかに有岡谷2号古墳がある。このような在り方は、町内の藏迫1～4号古墳、塚ヶ原1・2号古墳や高田郡八千代町土師地区の権現1・2号古墳、七郎谷2・3号古墳の例と同じで、町内本地の天狗松1～5号古墳、川西の木舟谷1～6号古墳、あるいは可愛川下流の高田郡吉田町や甲田町あたりの古墳のように、5・6基から10数基が群集する在り方とはかなりの差がある。これらの在り方は、その地域に生活を営み、横穴式石室を築造した集団の規模の違いに関連するのではないか。

石室の規模はその全貌をあきらかにしえないが、全長4.4m、奥壁の幅0.9m、最大幅1.1m、石室入口の幅0.9mで、石室の中央が最大で、奥壁部と羨道部の幅がせまい胴張りの平面形をなす。この形態は、藏迫2号古墳⁷⁾や隣接する高田郡八千代町の土師地区的古墳⁸⁾にほぼ共通し、規模は土師の七郎谷2号古墳の規模には等しいが、風化した石材をそのまま使用している点は極めて特異である。

古墳の築造時期については、石室内出土の須恵器の蓋付壺の形態からすると、土師

地区の古墳同様6世紀後半の新しい時期で、先年調査された藏迫2号古墳よりは先行するとみてよいであろう。

以上述べてきたように、本古墳はこの地域で一般的なタイプのものであるが、本古墳のように須恵器の壺蓋、壺身を伏せて床面に敷いた例は、藏迫2号古墳や土師地区の古墳にはみられない。

須恵器を敷いて棺床とする例をあげると、双三郡三良坂町皆瀬の植松1号古墳においては磚床の上に横瓶や壺・壺の破片を敷き、さらにその上に蓋付壺を蓋も身も伏せて並べて棺床としている¹⁾。庄原市木戸町の中大平古墳でも、同様の施設がみられた²⁾。また、高田郡高宮町波佐竹の後原2号墳・成安2号墳では石敷きの上に大型の須恵器をわって敷いていることがしらされている³⁾。本古墳では、地面の上に直接須恵器の蓋付壺を伏せて並べており、これらとやや様相を異にするが、蓋付壺を伏せて並べて棺床とした点では植松1号古墳、中大平古墳に類似する。しかし、植松1号古墳中大平古墳はいずれも丘陵の頂上に単独で存在する古墳であり、本古墳の在り方と大いに異なるとともに時期的にもやや古いようである。いずれにせよ、これらの古墳の関連性については、類例の検出をまって今後検討されなければならない。

その他の

有岡谷1号古墳の東南約30mの域が谷遺跡では黒フク中に弥生式土器、土師器、須恵器が包含されている。弥生式土器は弥生時代後期のものである。また、有岡谷1号古墳

石室内の覆土からは磨製の石斧が出土していることから、この谷筋はすでに弥生時代後期

頃から開発が進められたものであろう。この



第8図 石斧実測図

谷を切り開いた古代人の住居の一つが城が谷住居跡であり、切り開いた水田の生産力を背景として、城が谷1・2号箱式石棺、有岡谷1・2号古墳が築造されたと考えられよう。

(伊吹 尚)

註 (1) 広島県立府中高等学校地歴部「府中市大久保遺跡のスライド解説」

(『芸術文化11、13合併号』1958)

（学校博物館絵はがき第六輯）（1961）

- (2) 松崎寿和「古代農村の復元」(大学人会研究論集『広島の農村』 1955)
- (3) 広島県教育委員会『広島県文化財調査報告第7集』(1967)
- (4) 1971年広島県教育委員会が発掘調査した。
- (5) 潮見浩「広島県庄原市銀寄遺跡の調査」(私たちの考古学17 1958)
- (6) 名田富太郎『山県郡史の研究』(1953)
広島県立府中高等学校地歴部編『広島県古墳總覧第一巻』(1954)
- (7) 熊田董邦他「広島県千代田町藏道第2号墳発掘調査報告」

(広島女子短期大学研究紀要第11号 1961)

- (8) 土師埋蔵文化発掘調査団「土師」(1970)
- (9) 1972年広島県教育委員会が発掘調査した。
- 00 タ
- (10) 潮見浩「高宮町古墳群の緊急調査」(広島県文化財ニュース第19号 1963)

あとがき

本概報は伊吹尚、中田昭、松村昌彦、山県元の分担執筆により、伊吹尚が纏集した。

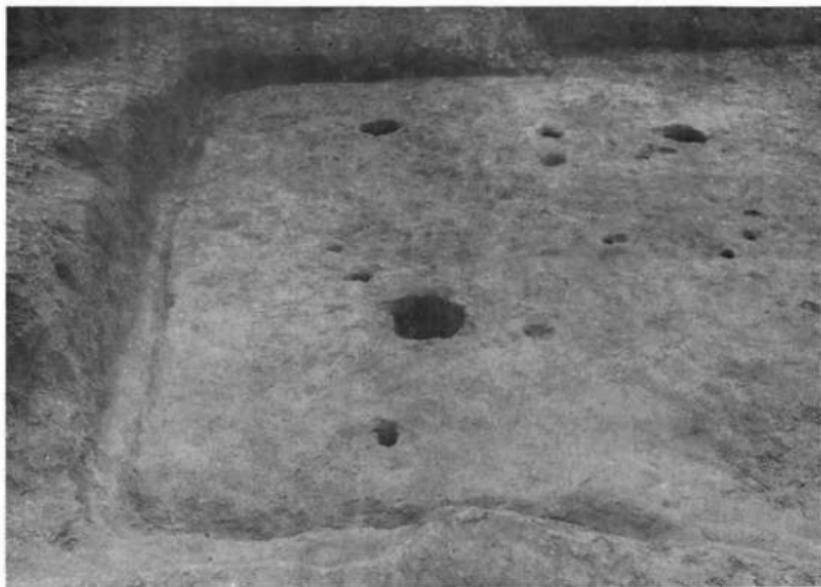
図面・遺物の整理にあたっては、上記のもののはか、文化財保護室員の協力をえた。



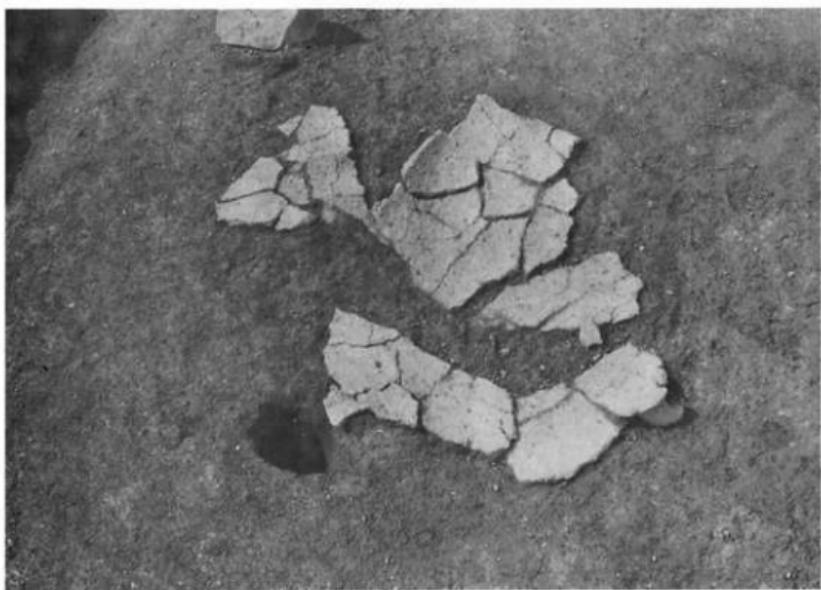
a. 住居跡遠景



b. 住居跡全景(東より)



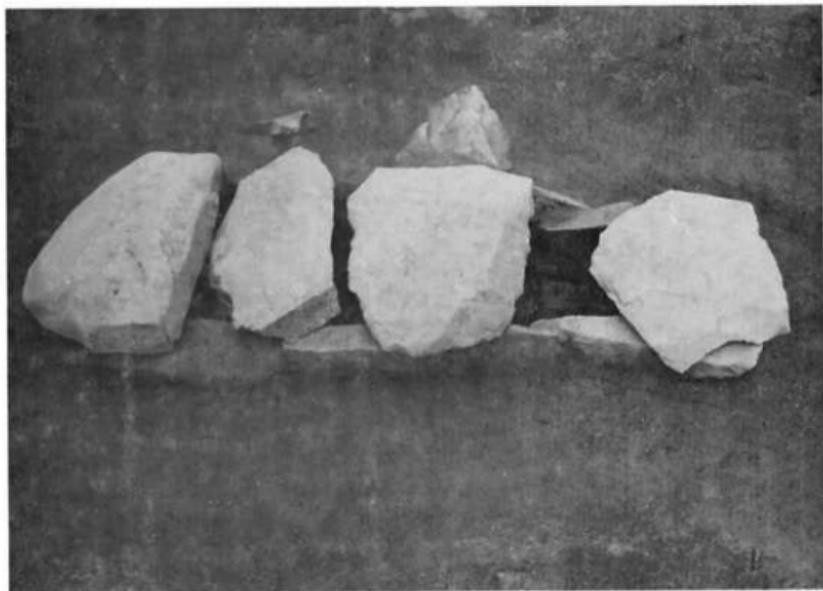
a. 住居跡全景(西より)



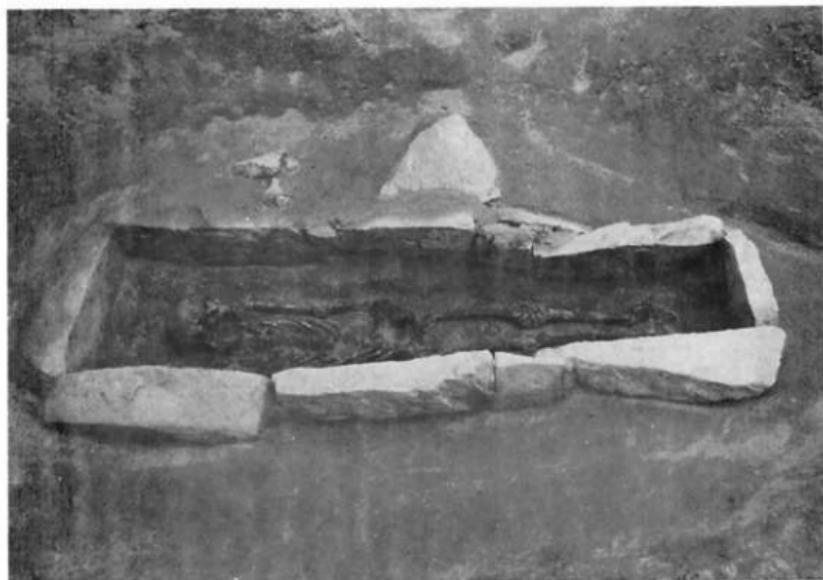
b. 振出土状態



a. 城が谷 1号箱式石棺遠景



b. 箱式石棺全景



a. 人骨出土状態



b. 同 上 部 分



a. 有岡谷 1 号古墳遠景



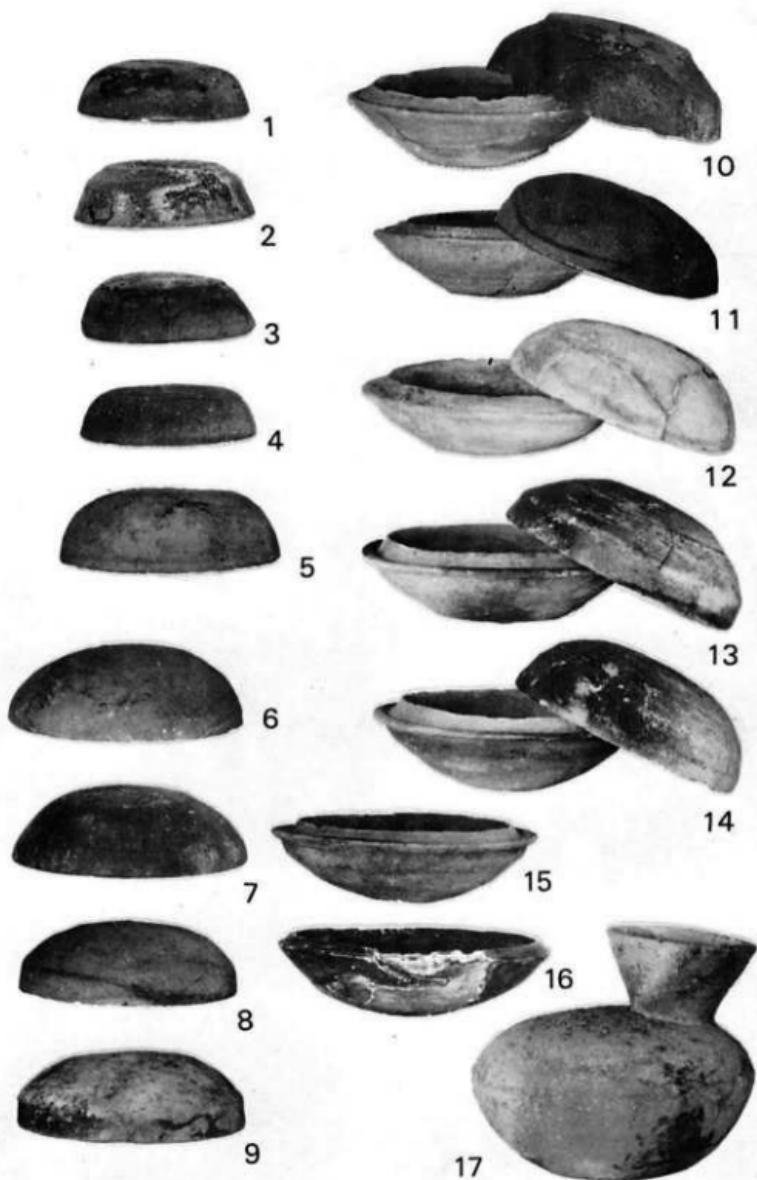
b. 同上 石室全景



a. 石室内遺物出土状態



b. 南側壁石積状態



有岡谷 1号古墳 須恵器 (1 : 3)



城ヶ谷住居跡 土師器・須恵器
(瓶・壺口1:4, 杯1:3)

1978年8月発行

城が谷遺跡群跡発掘査概報

—石田工業工場用地造成にかかる—

発行・編集 広島県教育委員会

印 刷 有限会社イマモト印刷